

+++++

ルール

獣医学科5年 瀧口晴嵩

小学校の頃、横断歩道を渡るときは「右を見て、左を見て、右を見る」と教わった。“良い子”のみんなは特に何も考えずにそれを遵守したはずだ。しかし、その直後左から車が来るかもしれないし、この回数に蓋然性はおそろくない。二回見るのが右であることに意味があるのか？そんなことに気付くのは時間の問題で、すぐに子供達は適切な回数確認するようになる。重視すべき方向を重点的に、臨機応変に確認するようになる。北海道のただっ広い道路を横断するのにいちいち確認するのは、ある種愚行ともいえる。もし赤信号だったら、しーんとする北海道の大地の上でじーっと待つのか？赤信号でも横断したとして、そこに警官がいたとして、警官はそれを注意するだろうか？

ルールの発祥は人々間の取り決めだ。しかし人が多くなり、発生しうる人-人、人-物の組み合わせが天文学的な数字になり、次第に対応できなくなってきた。そこで統率者が最大公約数としてのルールを作った。利益が最大になるようなカットオフ値を設定した。これのおかげで飛躍的に発生する問題は少なくなった。しかし反面、無意味に拘束される場面も当然発生しうる。前者に関しては問題ないが、後者に関して諍いがよく起こる。

ルールを守ったせいで無意味にめんどくさい時がある。むしろマイナスの時も

あったり、様々なフェイズがあると思う。「むしろマイナス」の時は、裁判沙汰にならない限り常識的に許される、いやその方が良かったと称されるときもあるが、ルールを破った以上思わぬ被害を被る者が存在し得ることは忘れてはいけない。しかしやはり、よく問題になるのは、「ルールを守ったせいで無意味にめんどくさい」のほうだろう。まさに北海道の横断歩道の例がぴったりだ。この例の場合、明らかに誰も迷惑をしていないので特に問題は発生しない。しかし、発生しうる問題を把握しきれていなかったり、日常のなか無意識に無視されている事がとても多いだろう。

注意しあったり、「意味があるのか」と問題定義しあうことでカットオフ値は微妙に変動し、その状況、時代に最適なルールが決まっていくことが最も望ましいことなのだと思う。あくまでも集団全体における最大利益。しかし、「ルールは絶対だ。」というのもあるが間違いでもない。その時たまたま無意味でも、そのルールがないとたくさんの悲劇が起きてしまう。

ルールとは、両面性を秘めた取り扱い注意物だ。